

「ハンドボール競技におけるゴールキーピングの構造」

ーサイドシュートを中心にー

櫻川 和 (1512034)

〈序論〉

○研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボール競技におけるゴールキーパーは、守備においては最後の砦として、攻撃においては自らシュートを狙ったりアシストをしたりと、全ポジションの中でも最も重要なポジションである。筆者は、中学生からそのポジションで活動してきた。ゴールキーパーの一番の仕事はシュートを阻止することであり、時にはシューターと1対1で、時にはディフェンスとの連携で阻止する。シュートの種類は、ロングシュート、サイドシュート、ポストシュートと様々あり、特にサイドシュートに対して苦手意識があった。その苦手を克服するために、全国トップレベルのゴールキーパーの動きを観察・分析したいと考えたことが今回の研究動機である。

本研究の目的は、サイドシュートの場面でのキーピング動作の構造を明らかにし、類型化を試みることである。この際、平成27年度全日本学生ハンドボール選手権大会でベスト8以上の試合を5つ対象とし、全てのサイドシュートに対するゴールキーピングの場面をビデオで撮影し、その中から運動感覚的諸徴表が際立って現れているものを選んで、観察した。そしてこれらの原資料の中から考察資料を抽出し、印象分析を行った。また、観察する際には筆者自身が体感してみたり、ビデオの再生速度を変えて観察してみたりして、何度も観察を行い、ゴールキーピングにおける特徴を捉え、構造を明らかにして名称をつけた。

〈本論〉

○ゲームの運動観察について

ここでは、サイドシュートにおけるゴールキーピングを研究するにあたって関係してくる運動モルフォロギー的考察法の中の印象分析および自己観察法について述べていく。印象分析とは、他者観察の不可欠な前提となる分析法である。そのため印象分析は、運動現象のなかに表れている諸徴表をとらえ、さらに厳密な分析研究のための重要な手段となる。また、自己観察法とは、自分自身の動きについて、その動きの一定の局面やその力動的な分節、その他のことを把握し、言葉で記述することで自分の運動を判断するということである。特に運動観察においては、ゴールキーピング動作について、「共同観察」を用いて間主観的客観な観察、分析ができることを明らかにした。このときマイネルの8つの諸カテゴリーから特に「運動の局面構造」、「運動リズム」、「運動の先取り」、「運動の正確さ」を用いて印象分析を行うこととした。

○ゴールキーピングの類型化

ゴールキーピングの構造体系については、多くの指導者が研究を行っている。これらの共通項をまとめると、①「位置取り・構え」、②「詰め」、③「跳び出し」、④「ミート動作」の4つに分類することができる。また、観察を進めるうえで、「①→②→③→④」と運動するものを「スタンダード型」、「①→②→④」と運動するものを「アクティブ型」、「①→③→④」と運動するものを「パッシブ型」とした。

○運動観察の実際

観察の際には、原資料の中から抽出した考察資料を編集し、それらを用いた。このとき編集した画像は、運動が動的に見えるように連続的に配置した。また、画像は以下のようなサイドシューターの動き、すなわちサイドシュートの構造に対応させた。

【助走→踏み込み・踏み切り→ジャンプ→テイクバック

→主要（シュートを打つ）→終末（シュートを打った）】

運動観察を進める中で、ボールミートに行くまでの過程に着目し、印象分析とその結果の考察を行い、以下のような結果が得られた。

表1 サイドシュートに対応したゴールキーピングの構造体系

サイドシュートの種類	ゴールキーピングの構造体系		
上からのサイドシュート	スタンダード型 Aタイプ	アクティブ型 Aタイプ	パッシブ型 Aタイプ
下からのサイドシュート	スタンダード型 Bタイプ	アクティブ型 Bタイプ	パッシブ型 Bタイプ
速攻でのサイドシュート	スタンダード型 Cタイプ	アクティブ型 Cタイプ	パッシブ型 Cタイプ
スカイシュート	その他		
ポスト位置	その他		

（結論）

本研究では、ハンドボール競技におけるゴールキーピングの運動構造について、特にサイドシュートに対応したゴールキーピングの運動経過を観察、分析することによって、その類型化を試みてきた。その結果、筆者なりにゴールキーピングの構造体系を明らかにすることができた。ゴールキーピングにおいて、ミート動作に至る過程は主要局面であり、ゴールキーパーの本質である「シュートを阻止する」ことにつながる動作である。つまり、試合の状況に応じた構え、位置取り、詰め、跳び出しを瞬時に判断、選択し実行することで最善のゴールキーピングを行うことができる。そして局面ごとに引き出しが多いほど成功率は上がり、より効率的なゴールキーピングにつながるができる。この構造体系やそれぞれの特徴を理解し、練習において何度も練習することで自動化させ、また、多くの選手のプレイを観察、実践することでゴールキーピングの幅を広げられると考える。ゴールキーパーの上達はコートプレイヤーの上達につながり、ハンドボール全体の競技力向上にもつながる。

（引用・参考文献省略）